

MJOT 会報

一年の活動を振り返って

MJOT 運営委員会代表
KISS ILONA

今年のハンガリーの夏は涼しい日があったり、暑い日があったりと、天候不順な日々が続いていますが、会員の皆様におかれましてはお元気でお過ごしのことと思います。

さて、夏休みも半ばを過ぎ、そろそろ新学期の準備が始まります。MJOT の代表を引き受けましてからの一年、さまざまな出来事がありました。この一年、皆様のご協力があったからこそ、なんとか大きな失敗もなく過ごせたのだと深く感謝致しております。MJOT 活動のメインとなるセミナーでは色々と興味深い講演を聞いたり、勉強になる話し合いが行われました。そして、卒業試験・入学試験も無事に終わりました。来年度から EU システムにしたがって、新しい中級・上級大学入学資格試験が導入されますから、MJOT としてもヨーロッパの教育政策の流れとニーズに合わせた日本語教育の研究・研修が取り組みの主たる課題になるのではないのでしょうか。そして直接教育に携わっている私達日本語教師が、この新学期より教育現場でシステムに合わせた指導を実践して行かなければなりません。

この他にこの一年の活動で特記すべき出来事がありました。それは MJOT を法人化するかどうかの重大な決断をするために開かれた 1 月の臨時総会です。総会の構成員である正会員の賛成多数により、運営委員会は即、法人化のための次の作業に入りました。法人化されるまでにはまだ少し時間がかかるようで、弁護士の指示に従い、裁判所からの認可を待っている状態です。

そして最後に、去る 7 月 8 日教育省外郭組織の OKÉV 高校卒業試験担当官との面談がありました。そこではこれまでの卒業試験の問題点を説明すると共に MJOT の活動を理解していただき、担当者からは新システムについての説明を受けました。そして MJOT 発足以来課題としていた高校卒業試験の作成を MJOT (含む MJOT 非会員 1 名) に任せられ、8 月 4 日に MJOT の主導のもと、第 1 回目の高校卒業試験作成委員会(仮称)を開いて、2005 年度からの高校卒業試験試案作りに取り組みました。

これからも MJOT 会員として、日本語教師として、様々な新しい役割や責任が出てきますが、より充実した活動ができるように取り組んで行きましょう。新学期に向かって、皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

NZからの便り

職業の枠を超え、国の境を超えて、MJOT の活動に賛同してくださっている特別会員の皆さん。前は日本から、今回は南半球の国からのお便りです。



特別会員

大杉 千恵子さん

NZ (ニュージーランド) では 1987・8 年の 2 年間、日本語を教えていました。日本の面積の 3/4 の国土、人口はようやく最近四百万人に達したという自然豊かなこの国の風景は最近の映画などで再認識されるようになったようです。南半球に位置し、8 月は冬の NZ から、久しぶりに垣間見た日本語教育の一端をお知らせしたいと思います。

ハンガリーと決定的に異なる点は NZ が英語圏であるということです。そして日本語はフランス語等と並んで第一外国語 (選択) のひとつとして教えられています。主に中等高等教育機関において 1980 年代半ばから 1990 年代後半まで日本語学習者は増え続けましたが、2000 年以降中等教育に新試験制度取り入れたこともあり、日本語を取る生徒は減少傾向にあるようです。試験でいい成績を取るためには、日本語で苦労するより、比較的容易に良い点が取れる科目に生徒が流れていくということらしいです。この傾向は今も続いているようですが、それでも日本語教育を行っている教育機関は 400 以上という、世界第 5 位 (1998) の位置付けです。ちなみに学習者数は 4 万人以上で、教師数は 650 人、NZ の高校、大学で日本語を学び、教員資格を取った現地の人たちも多く教壇に立っています。教師会も地域ごとのもの、全国組織のもの等、色々あり、場合によっては日本人だけで集まったりすることもあるようです。1980 年代日本語ブームの始まりの頃は教師不足で、ドイツ語教師が、日本人の奥さんがいるというだけで校長先生から日本語を教えるように頼まれ、今ではその奥さん共々二人で日本語教師になってるという人もいます。また、最近では初等教育機関でも日本語を導入しようという動きもありますが、現在のところは NZ 人の日本語教師が養成されているものの、生徒数が減少している状況で、日本語教師の職は飽和状態になっているようです。

もう一つの大きな違いは日本との感覚的距離にあるのではないかと思います。NZ は移民の国で、ありとあらゆる国からの人々が暮らしています。日本を含む外国との往来が盛んで、日本に興味を持つ人が日本へ行きたいと思えば、すぐにでも行ける様々な機会が豊富にあります。日本からの旅行者も多く、より密な交流による『近さ』が日本語教育普及の一因になっているようです。なにかのきっかけで日本に興味を持った高校生が学校で日本語を取り、自分で日本留学の機会を見つけてきて、高校の時点で日本に 1 年滞在し、その後は自らが英語教師として日本へ行くなどということが、その気にさえなれば比較的簡単にできるようです。

最近の興味深い現象としては、NZ 日本語教育における中国人や韓国人の存在です。NZ へは英語を学ぶためにアジアから多くの留学生が来ます。NZ にいる間に英語だけではなく、ついでに日本語も勉強しようというのです。大学での日本語学習者も減ってきた昨今、中国からの留学生が大量に日本語を取り始め、クラスの半分以上が中国人学生という大学の日本語授業もあり、中国語での私語やカンニングに神経をすり減らすという教師もいます。

交流基金からはアドバイザーが 2 人派遣され、公的な行事などももちろんありますが、それぞれの地方での個別の活動がより盛んです。日本留学の際、和太鼓に魅了されて帰国した NZ 人学生達自らの率いる和太鼓グループが NZ 各地を演奏旅行するようにまでなっていたりもしています。日本までの実際の距離はハンガリーからと変わらないのですが、NZ からは日本が比較的近いように感じられます。

大杉さん、ありがとうございました。
またのご投稿、楽しみにしています。(編集者)



MJOT 会員の研究発表、報告のコーナー！
 今回は 8 月下旬の欧州日本語シンポジウム
 (仏・リヨン市) で発表予定の佐藤先生から
 CEF について、8 月上旬の日本語教育研究国
 際大会 (東京) でヒダシ先生が発表した CEF
 の詳細、そしてセーカーチ先生からは 2005 年
 から導入のハンガリー大学入学資格試験と MJOT
 の取り組み経緯報告を掲載します。

①『ヨーロッパ日本語教師会 (AJE) による CEF の取り組み』

ヨーロッパ日本語教師会
 CEF プロジェクト委員会委員
佐藤 紀子

ヨーロッパ日本語教師会 (略して AJE) は、昨年国際交流基金日本語国際センターと委託契約を結び、ヨーロッパにおける言語教育に関する最新の動向と日本語教育事情の調査プロジェクトを進めています。本プロジェクトには、イギリス・ベルギー・フランス・ドイツ・アイルランド・スイス、そしてハンガリーの 8 カ国が参加しています。MJOT 会員の方々には、昨年末本プロジェクトに関連してアンケート調査へのご協力を仰ぎ、多くの方から回答を頂きました。この場を借りて、お礼を申し上げます。

皆様も良くご存知と思いますが、欧州議会が出版した「ヨーロッパにおける言語共通枠組み (Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment): CEF」は、2003 年に改定されたハンガリーの公教育の基準をなすナショナルコアカリキュラム (Nemzeti Alaptanterv 略して NAT) において、現代外国語教育のガイドラインとなっています。従ってハンガリーの日本語教育も、遅かれ早かれ、この CEF の基準に基づき、カリキュラムやシラバスを作成していかなければならなくなるでしょう。ハンガリーでは 2005 年度から大学入学資格試験が新しい制度に移行しますが、その出題基準もこの CEF に合わせて変わることが決まっています。中級・上級という 2 レベルによる大学入学資格試験 (Érettségi Vizsga) における日本語の試験も、新たに試験基準が作成され、試験問題が作られることになっています。

従って、ハンガリーにおいて日本語教育に携わる教師全てが、日本語教育のガイドラインをなす CEF を知る必要性が出てくると思われます。今後ヨーロッパの外国語教育に大きな影響を与えて行くと思われる CEF の概要をつかみ、その有効性を検証しようとする今回の AJE プロジェクトとそれへの参加は、ハンガリーの日本語教育界にとって大きな意義あることだと考えます。CEF はヨーロッパにおける外国語教育の透明性を高め、国際協力を推進していくことを目的としています。その教育ツールの一つである「ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio: ELP)」に関しても、ハンガリーは教育省の主導で当初より開発に参加しており、すでに初等・中等・成人教育用の ELP が認定 (2001 年) を受けています。

プロジェクトの報告書は来年出版される予定です。ハンガリーも参加している本プロジェクトの成果を MJOT 会員の皆様とも共有できるかと思います。ナショナルコアカリキュラムにおける現代外国語教育のガイドラインと日本語教育との関わり、ELP をハンガリーの日本語教育へ応用することは可能か、など MJOT として取り組む価値は大いにあると思われます。今後も会員の皆様といっしょに協力し合いながら、取り組んでいきたいと考えています。

②「ヨーロッパにおける日本語教育を考える」

神田外国語大学・ハンガリーブダペスト商科大学
Hidasi Judit

日本語教育研究国際大会 (2004 年 8 月 6 - 7 日 東京)

シンポジウム II のパネル テーマ: 世界の日本語教育のあしたを語る

パネラー: Chihiro Kinoshita-Thomson (豪州)

胡 振平 (中国) Hidasi Judit (欧州)

梁 安玉 (香港) 李 徳奉 (韓国)

傅 〇胎 (台湾) (氏名の表記はレジメ通り)

牧野 成一 (米国) 西原 鈴子 (日本)

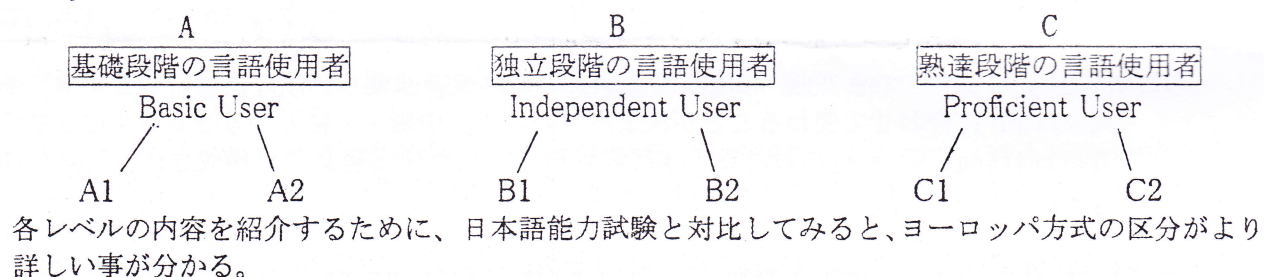
文化的にも言語的にも多様なヨーロッパでは、外国語教育に長い伝統がある。ヨーロッパの学校教育において、日本語が外国語として登場してきたのは 80 年代である。日本語を学習する目的や動機はさまざまであるが、主に実践的な使用を目的として選択されている。

現在、ヨーロッパの人々はだれでも、高校卒業までに母語以外の、少なくとも二ヶ国語が使えるよう期待されており、これが一般的目標になっている。この動向は、ヨーロッパが多言語・多文化であるという認識を内外に高め、かつ相互理解を深めようとすることから生まれたものである。

欧州共通言語フレームワーク

この目標を具体化するため、欧州評議会 Council of Europe は「欧州共通フレームワーク Common European Framework of Reference for Language (CEF)」を策定した。この言語教育政策の枠組みは、ヨーロッパにおける言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書などの向上のために詳細な共通基準を規定している。2004 年 8 月現在、日本語をも含め 10 ヶ国語でそのサイトにアクセスできる。http://www.soc.nii.ac.jp/jgg/jggla/library/cef_verzeichnis.html

欧州各国間の流動性が高まるなか、交換留学などによる学生の流動性、労働力や雇用可能人口の移動などを考慮して、統一的観点を築く目的で、言語の能力別達成レベル (Levels of Language Proficiency Achievement) を統一的に評価する様式が提案された。そこでは達成度別にまず三つの大きなレベル: A・B・C に分け、それをさらに枝分かれさせる「枝分かれ方式」(hypertext) が採用されている。



段階	欧州評議会の共通参照レベルシステム	日本語能力試験
A 1	Breakthrough サバイバル	4 級
A 2	Waystage	4 / 3 級
B 1	Threshold ベーシック	3 級
B 2	Vantage 操作能力が限定されている熟達度	3 / 2 級
C 1	Effective Operational Proficiency 適切な操作が可能な熟達度	2 級
C 2	Mastery マスター 総合的に操作できる熟達度	1 級

この表に基づいて、中等教育を終了した段階で、第一外国語では少なくとも B 2 レベル、第二外国語で少なくとも B 1 レベルに達することが期待されている。さらに実際の運用を目的とした European Language Portfolio (ELP) という統一した表か様式があり、学習した全言語について能力別達成レベルに即して、自分で成績を評価・記入できるようになっている。進学したり、あるいは転校したりする時、これを提示すれば進度と学力がすべて判断できるようになっている。

ELP は、言語学習、文化知識習得の分野でヨーロッパ各地において使用されており、学習者の言語学習への参加、内省を活発にさせ、複数言語主義(Plurilingualism)、異文化学習を促進するための教育的手段として位置付けられている。ELP は以下の三つの分野に分かれている。

Language passport	言語パスポート
Language biography	言語学習記録
Dossier	資料集

ここでいう言語パスポート(Language Passport)は、ヨーロッパ評議会の設定した6段階の熟達度の各レベルにおいて、学習者が自分自身で学習言語の達成度をスキル別に細かく記録していくものである。スキルは、今までのシステムと違って、新たにリスニング、リーディング、スピークン・インタラクション、スピークン・プロダクション、ライティングという5分野に分けられており、各スキルに幾つかの項目がある。興味深いのは、かつての「スピーキング」スキルの細分化である。これは明らかに、ヨーロッパの外国語教育で現在、スキルのうち、スピーキングが一番重要視されている事を反映している。偶然ではないと思われるが、2000年、京都外国語大学を中心とした国際研究グループによって発足した「欧州教材プロジェクト」は「インタラクティブ」方式の教材作成を目指している。さて、このスキルの自己評価の方法は、ELPの大きな特徴で、また利点でもある。教える側とともに、学ぶ側でも責任感が強まる事が望まれている。

ヨーロッパにおける日本語教育の将来

日本語は世界の127ヶ国教えられているとされるが(国際交流基金(2004)『2003年日本語教育機関調査：結果概要』http://www.jpfi.go.jp/j/japan_j/news/0407/07-01.html)、いうまでもなく教え方や学習の仕方は場所や文化によって異なる。外国語をハードウェアとするなら、教育や教え方はソフトウェアである。そのソフトウェアが文化や地域によって違うことを認識するなら、一日もはやく相手国の文化や地域性に見合った日本語教授法を確立することが望ましい。ローカルニーズを認めるソフトウェアが現地の人々にとってより使いやすく効果的だからである。日本語教育の将来をこういう立場から考えて行かなければならない。2001年から導入されているCEF「欧州共通言語枠組み」はヨーロッパ全土で利用されているので、ヨーロッパにおける日本語教育のあり方を考える時、この枠組みにおける方針や期待に沿うことも一つの前提条件としてゆく必要がある。

このたびヨーロッパ日本語教師会(AJE)は「ヨーロッパ日本語教育事情調査：ヨーロッパにおける堅固共通枠組みをめぐる」という題目で、国際交流基金日本語国際センターより2003年に業務委託を受けた。AJEが調査、執筆して、2005年春には交流基金より報告書が発行される予定である。

2005年は“EU-Japan people to people year”になっているので、これをきっかけに、日本とヨーロッパの間の関係の強化に積極的に貢献する事が望まれる。日本語教育面においては、ヨーロッパでの日本語教育の効率をどんな方法で、どんなふうに上げればいいのかということが、日本語教育関係者、教師や研究者の大きな課題であろう。

参考文献

CEF=Common European Framework of Reference for Language : Learning,teaching,assessment.
Council of Europe, Cambridge University Press,2001

Hidasi Judit(2003) : ヨーロッパにおける日本語教育を再考して。

「多元性のある日本語教育教材研究及び作成－欧州広領域での使用を目指して」－
最終報告『南山大学国際教育センター紀要』第4号 pp.67-76.

国際交流基金(2004) : 『2003年日本語教育機関調査：結果概要』

Little, D. & R. Perclová(2001) : European Language Portfolio: guide for teachers and teacher trainers.
Council of Europe: Strasbourg

関係ウェブサイト <http://europa.eu.int/activities> www.e-aje.org <http://europa.eu.int/institutions>

CEFに関するサイト <http://culture2.coe.int/portfolio/documentation/common-framework.html>
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jgg/jggla/library/cef_verzeichnis.html

ELPに関するサイト <http://culture2.coe.int/portfolio>

③2005 年度から導入される中級・上級大学入学資格試験

MJOT 運営委員会代表補佐 (教育政策担当)

セーカーチ アンナ

ハンガリー日本語教師会は発足以来、機会あるごとに高校卒業試験をテーマにセミナーを開き、また、「高校卒業試験を考える会」と名付けられた集まりでは卒業試験全般の問題点、卒業試験実施後には受験者の成果報告と試験問題そのものの問題点等を話し合ってきた。セミナーにおいても、考える会での話し合いでも最大のネックになっていたのが MJOT には教育省とのパイプがない事であった。このため、高校卒業試験の試験問題に問題があっても、それを是正する事はできなかったし、MJOT が試験問題作成に加わる意思さえ教育省に伝える事ができなかった。

2003 年 10 月、Hunfalvy 高校で行われた会議では、教育省国際部の Nagy Gábor 氏により 05 年度から導入される中級・上級大学入学資格試験の説明があったものの、曖昧な点が多く、参加者の一人として大変不満が残る会議であった。

新制度導入の次年度もこれまでと変わらず MJOT は蚊帳の外で、教壇に立つ者は新資格試験のはっきりした基準も分からない状態で授業を開始するのかと暗澹たる気持ちでいた所、誠にひよんなことから、教育省外郭組織である OKÉV (高校卒業試験・大学入学資格試験担当機関) より MJOT 代表に電話連絡が入った。そこで MJOT 運営委員会より Kiss, Goto, Székács、昨年より上記機関にコンタクトを取っていた ELTE の Szabó を加えて、4 名で 7 月 8 日に OKÉV へ足を運んだ。

OKÉV の担当官 Pongrácz 氏は 05 年度から導入される中級・上級大学入学資格試験制度や、試験問題について、英語の問題を例にしながら細かく説明してくれた。以下に新制度について詳細を記す。

新制度では、まず大学の入試制度が変わる。従来あった高校卒業 (大学入学資格) 試験と大学入学試験が 1 本化され、各大学が実施していた入学試験が廃止される。それに代わって、2 レベル (中級と上級) の大学入学資格試験が導入される。試験科目は 5 科目で、4 科目 (①ハンガリー語ハンガリー文学あるいは少数民族の言語とその文学、②歴史、③数学、④外国語) が必須で、残り 1 科目は自由選択科目である。各大学は学部ごと、学科ごとに受験科目とレベルを設定しているので、受験生は進学希望大学の学部・学科が設定している受験科目で受験し、設定されているレベルの点を取らなければ合格できないことになる。

さて、中級レベルの大学入学資格試験の筆記試験問題は全国统一のもので、試験会場は受験生が通う高校となる。口述試験の問題作成と評価も、受験生が通う高校の教師が詳細な出題基準に基づいて作成する。

次に上級レベルの大学入学資格試験。出題基準は高い。筆記・口述ともに全国统一試験である。筆記試験の採点はある特定の選出された二名の評価委員によって行われ、口述試験もある特定の選出された三名の試験官で組織された試験委員会によって行われる。上級口述試験の受験者が多い場合は委員会が高校へ出向いて口述試験を実施する。試験は 120 点満点。高校の成績で 60 点まで取得可能。残り 60 点は資格試験の成績で決まる。上級試験受験者で 40% 以上の成績を取った者は 1 科目につき 7 点のプラス得点 (2 科目まで) を獲得する事ができるため、134 点が満点となるケースも生じる場合がある。

現在上級レベルが大学入学条件となっているのは人文学部 II (Bölcsész 2) に限られており、日本学科は中級レベルの合格で入学できる。本年まで入学試験が行われていた ELTE 日本学科や Károli 大学日本学科の 05 年以降の受験科目は前述の受験科目の④外国語は、英語またはドイツ語または日本語となる。要するに日本語ができる生徒だけでなく、全くできない生徒も上記大学の日本学科へ進学可能(!?)となったのである。05 年以前に高校を卒業した者で、大学に進学を希望する者は OKÉV が試験を実施する。外国語検定試験受験希望者に対しても同様である。

最後に OKÉV の Pongrácz 氏は日本語の中級・上級大学入学資格試験問題作成を MJOT 及び日本語教師に委託。遂に教師会発足 4 年目にして、日本語を学ぶ学習者のために私達が最も望んでいた全国统一試験の日本語試験問題作成に取り組む事ができるようになったのである。試験問題の提出期限は 12 月 10 日。去る 8 月 4 日に運営委員の呼びかけで高校の日本語教師中心にお集まりいただいた。夏休み中にも関わらず、多くの先生方がご出席下さった。さっそく各レベルの基準が検討され、昼食をとるのも忘れて話し合われた。次回は 8 月 24 日。問題のない問題作りのために知恵を出し合って、いいものを作り上げましょう。

教育省・OKÉV のサイト: www.om.hu okev.kozpont@okev.hu

皆さん、さようなら！

JICA/JOCV 青年海外協力隊の日本語教師としてハンガリーに着任され、赴任校で日本語教育に携わるだけでなく、MJOT の会員としてもご活躍下さったお二人の先生より離任のご挨拶をいただきました。

ブダペスト商科大学 鈴木 愛さん

2001 年 12 月、私は青年海外協力隊員の日本語教師としてハンガリーに赴任し、間もなく教師会のメンバーに加わらせていただきました。

青年海外協力隊員の日本語教師は現在 9 名で、ほとんどの隊員が地方において一人で活動しています。その中で教師会に入っている者も、入っていない者もありますが、私自身は教師会と、日本語教師隊員がお互いに情報交換し、協力関係を築いていけたらと思っています。隊員は初め、ハンガリーの日本語教育事情について知識があまりなく、日本語教師としても経験が浅い者がほとんどですので、教師会の先生方から様々な面で今後ともアドヴァイスしていただけたらと思います。また逆に、隊員は経験は浅いのですが、若さとパワー(?) はありますので、教育現場（特に初等、中等教育機関、地方の教育機関）についての現状を伝えたり、勉強会などをして、こちらからもいろいろ発信していけたらいいと思っています。2 年半の間教師会の活動を通して、いろいろな経験、勉強をさせていただきました。本当にありがとうございました。会の今後の益々の発展をお祈りしています。



テレース・ヴァーロシュニカ国語高校 沖本 真理さん

私は 2002 年 7 月に日本語教師としてハンガリーに赴任しました。日本語教師としての経験はほとんどなかったものでいろいろと不安を抱えたまま授業は始まりました。テレース高校に着任後すぐヨーロッパ日本語シンポジウムがブダペスト商科大学で行われたので、MJOT の各先生方にお会いすることが出来、またヨーロッパ各地で活躍されている先生方の興味深い発表を聞くことができとても運が良かったです。教師会のセミナーではいろいろと勉強させて頂き授業の参考とさせて頂きました。また先生方との交流を通して日頃抱えている悩みを聞いて頂き、いろいろと助けて頂きました。この 2 年間本当にありがとうございました。

帰国直前に行った MJOT バザーでは、運営委員の先生方と、青年海外協力隊員とで売って楽しい、買ってうれしい思いを共有できて良かったです。(第 2 弾、生徒達も楽しみにしています!) ハンガリーでのいい出会い、いい経験、生徒達との思い出を大切に、この 2 年間で日本に帰ってから役立てたいと思います。ハンガリー日本語教師会のさらなる発展を期待しています。

二年以上にわたる協力隊活動、ご苦勞様でした！お二人の先生の益々のご活躍を心より祈っております。

2004年 MJOT 総会のお知らせ

9月9日(木) 17:00～
国際交流基金図書室

第五回 MJOT 定例総会

- ・2003年9月～04年8月までの
活動報告と会計報告
- ・MJOT 法人化の経緯報告
- ・役員改選
- ・連絡事項、その他



運営委員会より

- ① 9月9日に第五回目の定例総会を行います。当日議題として取り上げて欲しい件、連絡事項などがありましたら、8月31日までに運営委員会後藤まで e-mail でご連絡下さい。
- ② 初級日本語語彙集の販売！
もうすぐ新学期が始まります。今年2月に印刷完了した第2版の語彙集を常時販売しています。
1冊950円です。相馬か後藤へ電話にてご連絡下さい。
(相馬：06-1-326-0898)
(後藤：06-306-551-480)

- ③ 高校卒業試験作成委員会（仮称）
日時：8月24日（火）13:30～
場所：基金 Bp. 事務所セミナー室
 - ・卒業試験と日本語中級及び上級試験の基準に合わせた問題試作
 - ・試験問題提出までの役割分担とスケジュール調整

高校で日本語を教えている先生は
必ずお集まりください！！

スピコン実行委員会より

第12回日本語スピーチコンテスト

日時：04年11月6日（土）

12:30～

場所：日本大使館 多目的ホール
(予定)

原稿〆切：10月1日（金）必着
書留郵送である事！

原稿送り先：国際交流基金 Bp. 事務所
1027 Budapest, Horvát u.14-24
Japán Alapítvány

スピコン実行委員：KISS ILONA
吉瀬 友佳子

発行者：ハンガリー日本語教師会(MJOT)
「会報 12号」

2004年8月10日発行
編集者：セーカーチ アンナ 後藤 史与